

紅^{べに}が谷^{やつ}の青い空・再説

『行人』『心』、二つの鎌倉

藤 井 淑 禎

1

『心』（『東京朝日新聞』大正三・四・二〇～八・一一、大正三・九刊）の冒頭の舞台となっているのは、鎌倉である。「私が先生と知り合になったのは鎌倉である」（上二）とあるように、海水浴で鎌倉に来ていた友人に誘われて合流したものの、友人は国元からの電報で呼び戻され、ひとり取り残された「私」がしばらく滞在を続けるうちに、西洋人を連れて海水浴に来ていた「先生」を見かけたのがキツカケだった。

私は実に先生を此雑踏（海や浜辺が海水浴客で混雑していた―藤井注）の間に見付出したのである。其時

海岸には掛茶屋が二軒あつた。私は不図した機会から其一軒の方に行き慣れてゐた。長谷辺に大きな別荘を構へてゐる人と違つて、各自に専有の着換場を拵へてゐない此処いらの避暑客には、是非共斯うした共同着換所といった風なものが必要なものであつた。（上二）

ここには、長谷という具体的な地名が出てくる。同時に、「此処いら」が長谷ではないことも明示されている。同様のことが、こんな個所についても言える。

私は其二日前に由井が浜迄行つて、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で、其すぐ傍が

ホテルの裏口になつてゐたので、私の凝としてゐる間に、大分多くの男が潮を浴びに出て来たが、いづれも胴と腕と股は出してゐなかつた。(上二)

「先生」の連れていた西洋人が、なぜか日本人並みに「猿股一つ」しか身につけていなかったことからの二日前の回想だが、「逆行つて」とあるので、長谷の場合と同様に、やはり「此処」が「由井が浜」ではないことがわかる。もっとも、当時は鎌倉海岸東端の材木座海岸から西端の坂の下までを「由比ヶ浜」(一般的な表記に従う)と総称し、それとは別に今の由比ヶ浜地区だけを指して由比ヶ浜と呼ぶこともあったが、「少し小高い丘の上で、其すぐ傍がホテル」云々とあるので、ここでは狭義の由比ヶ浜を指していたとわかる。そしてその由比ヶ浜では、ここは、ないのである。

いっぽうで、長谷とか由比ヶ浜などといったように、具体的な地名を出しながら、なぜか「此処」に関しては、単に「鎌倉」としか記さない書き方。何か特別のこだわりが、ここからは感じ取れないだろうか。

2

ほかに、こんな個所もある。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあつた。玉突だのアイスクリームだのといふハイカラなものには長い暇を一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘は其処此処にいくつでも建てられてゐた。それに海へは極近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めてゐた。(上二)

こだわりは、ここにも貫かれている。長谷でも由比ヶ浜でもなく、しかし絶好の海水浴場ではあるような場所。しかも、右の引用中には、それに加えて、「暇」とか「二十銭」といったきわめて具体的なヒントまである。

これらのことについて、ボクは若草書房版『漱石文学全注釈12 心』(二〇〇〇・四)の注釈で、ある程度踏み込んだ見解を述べているが、たとえば海水浴場については、「掛茶屋」の項で、このように注を付けている。

『現在の鎌倉』によれば、鎌倉の海岸には「数十の

私設海水浴場」と別荘客用の「個人専用の海水浴場」が設けられ、「海岸は見渡す限り葦簾に包まれた脱衣場が軒を並べて隙がないと言っても良い程」だった。明治四十三年からは更衣所つきの公設海水浴場も材木座海岸はじめ四ヶ所に設けられたというから、こっちのほうを思い浮かべた読者もいるかもしれないが、時期設定の上ではこの出会いはそれよりもかなり以前のことは**はず**である。

『現在の鎌倉』はここでは初出だが、著者は大橋良平なる人物。明治四五年七月に鎌倉の通友社から刊行された全七四ページからなる鎌倉案内書である。自序に、「世に鎌倉の案内著書は多し、皆共に名所古址の案内のみに止つてゐる、現在の鎌倉が何れ程に発展しつゝ、あるかを見るものがないのは遺憾である、茲に聊か微力を以て現在の鎌倉を編して理想の案内記としたのである」とあるように、「鎌倉の交通機関」、「現在の貸家賃間料」、「別荘一覧」、「営業一覧」など、当時の鎌倉をうかがうには恰好のガイドブックとなっている。

注釈では、「明治四十三年からは更衣所つきの公設海水浴場も材木座海岸はじめ四ヶ所に設けられた」としか書いて

ておかなかったが、もう少し補うと、『現在の鎌倉』には「鎌倉の海水浴場は毎年七月二十日より九月七日迄の間開設してある、場所は由比ヶ浜、極楽寺、坂の下、材木座海岸の四ヶ所である、各所には間口七間奥行三間の更衣所が建設されて内部は男女の区別が厳然としてある」などと記されている。

「先生」と「私」が利用した掛茶屋がこの「更衣所」であつたとは限らないが、少なくとも、鎌倉海岸の海水浴場が「由比ヶ浜、極楽寺、坂の下、材木座海岸の四ヶ所」でほぼカバーされてしまうことはまちがいないさそうだ。だとすれば、先に見たように長谷と由比ヶ浜は候補から外れるわけだから（極楽寺と坂の下は、長谷に至近）、「先生」と「私」の出会いの場所はいぶ絞られてくるわけである。

そのうえに、「暇」と「二十銭」である。後者について**は**、こんな注をつけてある。

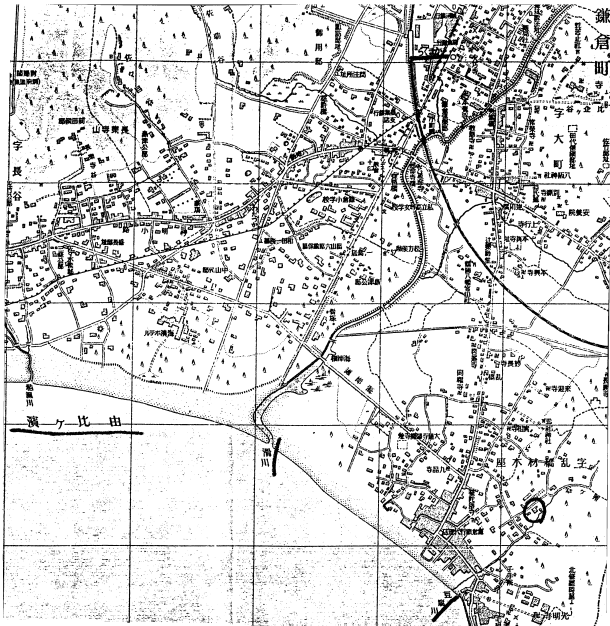
大橋良平『現在の鎌倉』に駅からの人力車料金が掲げられており、由比ヶ浜の両端にあたる材木座の光明寺と長谷近くの「坂の下」までが共に二十銭。ただし後に大別荘地としての「長谷辺」と「此処いら」が対置されていることから後者の可能性は薄い。（一部略）

また、前者についてはここには注をつけていないが、鎌倉の町を東西に二分する（ただし駅や八幡宮、小町通りなどの繁華な場所は西側に集中）滑川沿いの土手道あたりが有力な候補ではないだろうか（下段の大正八年の地図の右上から斜めに流れるのが滑川）。だとすると、滑川の東方向にある材木座海岸がますます有力候補となってくる（右下の光明寺の浜が材木座海岸。後出の六四二番地や豆腐川にも印をつけておいた）。

さらにそれを裏付ける個所もある。何日か続けて海水浴場で「先生」を見かけた後、メガネを拾ってあげたことをキッカケとして言葉を交わすようになった「私」が、「先生」の宿舎を訪ねる個所は、「私は其晩先生の宿を尋ねた。宿と云つても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のやうな建物であつた。其処に住んでゐる人の先生の家族でない事も解つた」と書かれている。

そしてそれに対しては、このような注がつけてある。

鎌倉に詳しい読者であれば、これまで述べてきたように、長谷近辺でもなく、由比ヶ浜の中心部でもなく、かつ人力車で二十銭の「辺鄙な方角」ということから、材木座近辺、さらには「広い寺」から材木座の光明寺



を連想しただろう。『現在の鎌倉』によれば、光明寺は師団の軍人たちや、陸軍幼年学校・士官学校の生徒たちの遊泳訓練中の宿舎として広く利用されており、同書が材木座の宿泊施設の一つとしてあげている光明館なるものもその関連施設と思われる。笹井花明「士官候補生（三）」（『少年世界』明治二九・六）には、その士官学校生たちの光明寺前の海岸での遊泳訓練の様子が活写されており、「光明寺の前の路次を抜けて、浜辺に出ると直ぐ其処が遊泳処」であるとか、泳力によつて三グループにわかれていた（単純なスパルタ式ではなく意外に合理的だ）ことだとかがわかる。食事が弁当利用であつたというのも、寺付属の施設ならではのことだ。

ここまで見てきてわかることは、具体的な地名や手がかかりが多く与えられ、出合いの場所が材木座海岸であることはほぼ確実であるにもかかわらず、それを「鎌倉」としか記さず、その意味では、『心』という作品には「鎌倉」をめぐって独特なこだわりが見られるのではないか、ということである。

3

このことを、どう考えればよいのだろうか。少なくとも『心』に限定して考えている限りは、打開策はなかなか見つかりそうもない。——ここで、想起されなくてはならないのは、前作『行人』（『東京朝日新聞』大正一・一二・六〈大正二・四・七中断、大正二・九・一八再開〉一一・一五、大正三・一刊）の後半部分にも「鎌倉」が登場してきていたという事実である。だとすれば、そこでの「鎌倉」の描かれ方はどのようなものであつただろうか。

ただし、そうは言っても、『行人』には「鎌倉」そのものは登場しない、というか、「鎌倉」という地名は記されていない。鎌倉のごくごく一部分が描かれ、そこに「紅が谷」という鎌倉に実際にある地名（材木座海岸や光明寺のごく近く）が当てられているに過ぎないのである。

「友達」、「兄」、「帰つてから」、「塵勞」の四部から成る『行人』は、途中作者の病気による中断があり、大正二年九月一八日から最後の「塵勞」の連載が開始された。小説の語り手である長野二郎には、学者肌で気難しい性格の兄・一郎がおり、その一郎は妻のお直の心がつかめないことに悩んでいて、お直の気持が二郎の方に向いているのではな

いかとさえ思うことがあった。二郎が独身で同居していることもあって、一郎の疑念はなかなか晴れず、生来の性格や仕事の重圧とも相まって、周囲からは神経衰弱を心配されるような状態にまでなった。

二郎が下宿して家を出たにもかかわらず、一郎の精神状態には改善の兆しがなく、気分転換のための旅行計画が家族の間で練られるようにまでなる。親友のHさんに頼んで、一郎を旅に連れ出してもらおうというのである。最初は腰の重かった一郎だったが、Hさんの説得の甲斐あって、夏には海か山かどこかに行こうということになった。そして、かねてから自分が兄からどう見られているかを気にしていた二郎は、Hさんに旅先からの一郎の挙動報告を依頼し、Hさんも結局はそれを受け入れる。こうして、「塵労」の半ば（全五二回中の二八回くらいから）以降、Hさんと兄の動静、とりわけ兄の精神状態の変化が、逐一かつ刻々と二郎と読者の元に届けられることになるのである。

二人の旅は当初「逗子を基点として」（『塵労』三〇）「伊豆の海岸を廻る」（『塵労』二五）予定だったが、それではあまりに平凡過ぎるという理由から、基点は沼津に変更された。沼津に二日滞在し（『塵労』三五）、そして三島から大仁、修善寺へ。さらには小田原、箱根へ（『塵労』

四三）。その間、Hさんと一郎の間では、運命、人生、世界、宗教、神、絶対、自然、所有、心、死、等々をめぐって真摯な対話が重ねられ、「生死を超越」（『塵労』四四）、「絶対の境地」の獲得（『塵労』四五）、をめぐって激論が交わされた。しかし、気分転換を目的として訪れたはずの山も海も、「今迄通つて来たうちで、兄さんの氣に入つた所はまだ一ヶ所ありません」（『塵労』四六）。そのあげくに二人が辿りついたのが、「此紅が谷の小別荘」（『塵労』四六）だったのである。

我々は二三日前から此紅が谷の奥に来て、疲れた身体を谷と谷の間に放り出しました。居る所は私の親戚の有つてゐる小さい別荘です。（中略）

別荘といふと大変人聞が好いやうですが、其実は甚だ見苦しい手狭なもので、構へからいふと、丁度東京の場末にある四五十円の安官吏の住居です。然し田舎丈に邸内の地面には多少の余裕があります。庭だか菜園だか分らないものが、軒から爪下りに向ふの垣根迄続いてゐます。其の垣根には珊瑚樹の実が一面に結つてゐて、葉越に隣の藁屋根が四半分程見えます。

同じ軒の下から谷を隔て、向ふの山が手に取るやう

に見えます。此山全体がある伯爵の別荘地で、時には浴衣の色が樹の間から見えたり、女の声が崖の上で響いたりします。其崖の頂には高い松が空を突くやうに聳えてゐます。我々は低い軒の下から朝夕此松を見上げるのを、高尚な課業のやうに心得て暮してゐます。

「塵勞」二九

このように記された日さんからの手紙は、出発から一日目に二郎の手に届いた。「二三日前から此紅が谷の奥に来て」とあり、投函から届くまでに二日ほどかかったとすると、沼津から箱根までで一週間ほどつぶしたことになる。「塵勞」五二には、東京を發つてから手紙執筆の今日まで一〇日とある」。そして、この間つねに二人は行動を共にしていたので、手紙を書くことなど不可能だったと日さんは言う。それがこの地に来て、ようやく一郎に氣兼ねをせずに手紙を書けるようになったと言うのである（この二九からは最後の五二まで日さんの手紙文が延々と続く。そしてその最後を見ると、日さんがこれを書く間、一郎はずつと「ぐう／＼寝て」いたとある）。

4

それまで神経的に昂ぶっていた一郎だったが、紅が谷に来てからは次第に落ち着きを取り戻すようになっていったという。

今迄通つて来たうちで、君の兄さんには此処が一番氣に入つたやうです。それには色々な意味があるかも知れませんが、二人ぎりで独立した一軒の家の主人になり済まされたといふ氣分が、人慣れない兄さんの胸に一種の落付を与へるのが、其大原因だらうと思ひます。今迄何処へ泊つてもよく寝られなかつた兄さんは、此処へ来た晩からよく寝ます。現に今私がかうやつて万年筆を走らしてゐる間も、ぐう／＼寝ています。

「塵勞」二九

いったい、何が一郎をこれほどまでに落ち着かせたのか。「二人ぎり」で独立した一軒の家の主人になり済まされたといふ氣分」のほかに、もう一つ日さんがあげているのは、「普通の宿屋のやうに二人が始終膝を突き合はして、一つ部屋にごろ／＼してゐないで済む事」〔「塵勞」二九〕だった。

家は今申した通り手狭至極なものであります。門を出て右の坂上にある或る長者の拵へた西洋館などに比べると全くの燐寸箱に過ぎません。それでも垣を囲らして四方から切り離した独立の一軒家です。窮屈ではあるが間数は五つ程あります。兄さんと私は一つ座敷に吊つた一つ蚊帳の中に寝ます。然し宿屋と違つて同じ時間に起きる必要はありません。片方が起きてても、片方は寝たい丈寝てゐられます。(中略)昼も其通りです。二人差向ひであるのが苦痛になれば、何方かが勝手に姿を隠して、自分に都合のいい事を、好きな時間丈やります。〈塵勞〉二九〉

このあたりまでがHさんからの手紙の前置き部分であり、ここから「塵勞」四六までは、沼津から箱根までの一週間の過酷な日々の報告が続く。ただし、そのなかにも、ほんのわずかだが、「二六時中何をして、其処に安住する事が出来ない」〈塵勞〉三二〉はずの一郎が、束の間の解放感を得る描写も見出される。

朝起き抜けに浜辺を歩いた時、兄さんは眠つてゐる様な深い海を眺めて、「海も斯う静かだと好いね」と

喜びました。近頃の兄さんは何でも動かないものが懐かしいのださうです。其意味で、水よりも山が気に入るのでした。〈塵勞〉三三〉

あるいは、電車の中で「如何にも苦のなささうな顔」、「邪念の萌さないぼかんとした顔」を見て、「しみじみ嬉しい」と感じたり、また、ある時のHさんが「凡ての事を忘れ」、その「天然の儘の心」、「純粹な誠」(同前)を尊いと感じたり、というような場面なども、この仲間に入れていいだろう。「自分に誠実でないものは、決して他人に誠実であり得ない」〈塵勞〉三六〉と説く「自然を尊む人」〈塵勞〉三七〉としての一郎を、Hさんも遅ればせながらに理解し始めるのである。

「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」〈塵勞〉三九〉とも口走る一郎に対して、不用意に神という言葉を口にしたHさんは、「僕は車夫程信用出来る神を知らないのだ」〈塵勞〉四一〉と反駁され、「純粹に心の落ち付きを得た」、「生死を超越」した「絶対の境地」〈塵勞〉四四、五〉こそが、一郎が到達しようとしてできずにいるものだと言白される。

以上は箱根滞在中の出来事だが(たまたま二日目は隣室

に客がおらず、このような話のやりとりも可能だった、通俗かつ喧騒な箱根の宿は、心を病んだ一郎にとつてはもつとも忌むべき場所だった。そこで、「二度と斯んな所は御免だ」とこぼす一郎を伴って日さんは紅が谷へとやつてくる。「兄さんは私から此別荘の話を聞いて、しきりに其処へ落ち付きたがつてゐたのです」〈塵勞〉四六。そして期待通り、紅が谷は一郎に束の間の安息をもたらすことに成功したのである。

5

すでに紹介したように、日さんは紅が谷の効能を、「二人ぎりで独立した一軒の家の主人になり済まされたといふ気分」と「普通の宿屋のやうに二人が始終膝を突き合はして、一つ部屋にごろ／＼してゐないで済む事」〈塵勞〉二九とに見出していたが、紅が谷の効能は決してそれらにとどまるようなものではなかった。そのことは、「塵勞」四七以降詳述される紅が谷での二人の暮らしぶり、とりわけ一郎の言動をひとつひとつ追つていけば容易にわかることだ。

何にでも刺激され易い癖に、何んな刺激にも堪へ切

れないと云つた風の、今の兄さんには、草庵めいた此別荘が最も適してゐたのかも知れません。兄さんは物静かな座敷から、谷一つ隔て、向ふの崖の高い松を見上げた時、「好いな」と云つて其処へ腰を卸しました。〈塵勞〉四七

無人の時は別荘の留守番をする爺さんが拭き掃除と水汲みに朝夕来てくれ、三度の食事もある所の宿屋に出前を頼み、電灯があるのでランプを点す手間もかからず、「朝起きてから夜寝る迄に、我我の是非やらなければならぬ事は、まあ床を延べて蚊帳を釣る位なものです」というのんびりとした毎日が、そこでは繰り広げられる。

「自炊よりも氣楽で閑静だね」と兄さんが云ひます。實際今迄通つて来た山や海のうちに、此処が一番静に違ふのです。兄さんと差向ひで黙つてゐると、風の音さへ聞こえない事があります。多少八釜しいと思ふのは珊瑚樹の葉隠れにぎ／＼軋る隣の車井戸の響ですが、兄さんは案外それには無頓着です。兄さんは段々落付いて来るやうです。私はもつと早く兄さんを此処へ連れて来れば好かつたと思ひました。(同前)

庭先にある畠には茄子やとうもろこしが生り、勝手口の井戸のそばにはトマトも植えてある。「それを朝顔を洗ふ序に」二人で食べるようなこともあった。そんな毎日を送るうちに、一郎は、彼にとつて最大の課題である「我を忘れる」ことすらできるようになつていった。

兄さんは暑い日盛に、此庭だか畑だか分らない地面の上に下りて、凝と蹲踞んでゐる事があります。時々かななの花の香を嗅いで見たりします。かななに香なんかありやしません。凋んだ月見草の花片を見詰めてゐる事もあります。着いた日杯は左隣の長者の別荘の境に生えてゐる薄の傍へ行つて、長い間立つてゐました。私は座敷から其様子を眺めてゐましたが、何時迄経つても兄さんが動かないので、仕舞に縁先にある草履を突掛けて、わざ／＼傍へ行つて見ました。隣と我々の住居との仕切になつてゐる其処は、高さ一間位の土堤で、時節柄一面の薄が蔽ひ被さつてゐるのです。兄さんは近づいた私を顧みて、下の方にある薄の根を指さしました。

薄の根には蟹が這つてゐました。小さな蟹でした。親指の爪位な大きさしかありません。それが一匹では

ないので。しばらく見てゐるうちに、一匹が二匹になり、二匹が三匹になるのです。仕舞には彼処にも此処にも蒼蠅い程眼に着き出します。

「薄の葉を渡る奴があるよ」

兄さんは斯んな観察をして、まだ動かずに立つてゐます。私は兄さんを其処へ残して又故の席へ帰りました。

兄さんが斯ういふ些細な事に氣を取られて、殆んど我を忘れるのを見る私は、甚だ愉快です。(同前)

一郎が「蟹に見惚れて、自分を忘れる」(「塵勞」四八)

このシーンは、言つてみれば『行人』という陰鬱に閉ざされた世界に、突然開いた天窓からさわやかな涼風が一気に吹き込んできたかのような爽快感を感じさせてくれる場面だ。「暑い日盛に、此庭だか畑だか分らない地面の上に下りて、凝と蹲踞」む一郎。「時々かななの花の香を嗅いで見たり」する一郎。「凋んだ月見草の花片を見詰め」る一郎。「別荘の境に生えてゐる薄の傍へ行つて、長い間立つてゐる」る一郎。どれも、一郎が鬱屈した精神状態から解き放たれたことを示唆する描写なのである。

「好いな」(松を見上げての言葉)とか、「自炊よりも氣

楽で閑静だね」とか、「薄の葉を渡る奴があるよ」といった物言いさえも、こころなしに、解き放たれた一郎の心の弾みをあらわしているかのようだ。このように、紅が谷に滞在することで一郎が鬱屈した精神状態から解き放たれたのは、日さんが挙げた二つの理由（『塵勞』二九）もさることながら、何よりも紅が谷の自然そのものが持つ感化力に負うところが大きかったのであり、それによって一郎は癒され救われたのだと考えたほうがよいように思われる。

ここで、先に述べた『行人』における「鎌倉」の描かれ方という問題に戻れば、そもそも紅が谷が鎌倉の地名だということを知っている読者はどれほどいただろうか。おそらく、ほとんどいなかったのではないだろうか。なにしろ、ここには「鎌倉」はもちろん、比較的知られている、すぐ近くの「材木座」という地名すら記されることはなかったのだから。だとしたら、大部分の読者にとって紅が谷とは、〈箱根を登ってやって来たところ〉以上でも以下でもないどこか、でしかなかったことになる。そしてそこで、一郎は癒され救われたのだ。この問題については、最後のほうでもう一度考えてみることにしよう。

6

ところで『行人』のこの紅が谷の別荘をめぐる部分が、漱石の実体験に基づくものであることは、全集の読者なら知ることができた。明治四五年八月の家族宛の漱石書簡などに見られる「神奈川県鎌倉材木座紅ヶ谷田山別荘」というのが、「此紅が谷の小別荘」のもとなったものだったのである。漱石の日記によれば、明治四五年七月二日に漱石は家族と共にこの貸別荘にやってきた。

○二十一日「日」小供を鎌倉へ遣る。一汽車先に行つて菅の家に入る。二階から海を見る。涼し。主人と書を論ず。何紹基の書を見る。午後小供のある所へ行く。材木座紅ヶ谷といふ。思つたよりも汚なき家也。夏二月にて四十円の家なれば尤もなり。庭に面して畠あり、畠の先に山あり大きな松を寝ながら見る。其所は甚だ可。たゞ家の建方に至つては如何とも賞めがたし。東京の新開地の尤も下等な借家の如し。

さらに、翌日の日記。

○二十二日「月」、浜へ出て見ると、海浜院に逗留の唐人海につかつてゐる。女は赤や水色の手拭様のものを頭へ巻きつける。着物も膝迄のを着る。四時五十何分の汽車で帰る。(後略)

鎌倉に来る前日の七月二〇日は明治天皇が重体との号外が出た日だった。そして七月三〇日の崩御となる。いっぽう、家族を鎌倉において帰京していた漱石は八月二日に再び鎌倉にやつてきて、今度は二泊して四日に帰京している。この間の、天皇崩御と漱石の鎌倉行きとの関係については「天皇の死をめぐる――『こゝろ』その他――」(『国文学解釈と鑑賞』昭和五七・一一)や『漱石文学全注釈12 心』で論じたので、ここでは省略する。

さて、その八月二日から四日までの日記だが、主なものを紹介すると、このようになる。

○八月二日「金」鎌倉に行き二日三日とまつて四日の夜帰る。

九時四十分の汽車で行く。(中略)

○仲六二日程前より熱。猩紅熱ときまつて今朝病院に入院したといふ。車で行つて見る。東京から呼び寄せ

た看護婦とつねが世話をしてゐる。(中略)夜消毒をしに家に来る人五六人。皆白い着物をきて家中石炭酸の臭がする。散歩から連れて戻つた小供が盆檜してしまふ。暗い夜で、あたりの別荘はしんとしてゐる中で自分の家丈が火の影や白い着物の行違ふ影でごた／＼するのを立つて見てゐるのは変である。

(中略)消毒掛の人が、しきりに消毒をすゝめる。自分の洋服と妻の着物丈はチャブ台に載せて暗い畠の中に出して置く。

夜は夜具が足りないのを工夫して二つの蚊帳に子供六人我等夫婦岡田とみねと寝る。

三日「土」。小宮が藤村の菓子をもつてくる。みんな海へ行く。遠浅でよき所なり。子供等は浮ぶくろを背負つてボチャ／＼す。(中略)

四日「日」寒いのを我慢して海へ這入る。ひるからあみだをやる。(中略)

六時過の汽車で帰る。日曜だから中等客一杯。小宮と一等に移る此所には独乙人が五六人乗つてゐた。

(中略)

○松の枝に御櫃が干してある。蟹が松の下を這ふ。まさきの桓。ひかんの黄な花(婆さんが西洋の芭蕉

といふ）桔梗。百合。月見草。唐茄子。ササギ。玉蜀黍。芋。茄子。仁参（丸い仁参）。青いトマト。

珊瑚樹の垣。珊瑚樹の花。遠くから望むと綺麗なり。

光明寺の裏の松山の松が軒を圧して見える。

これらは全集では『日記・断片』の巻に収められているが、最後の数行などは、創作メモ的に書きとめられたものと言える。さらに言えば、日付のある日記部分も、創作メモとして利用できないはないだろう。これに対して、書簡はそういう利用はむずかしいが、「紅が谷の小別荘」のもとなつた現実の「田山別荘」に関する情報を補う、という意味では十分参考になる。

「鎌倉へ小供をやり」の件は七月二三日以降の書簡に何度も出てくるが、八月一〇日付の寺田寅彦宛の手紙では、二日から四日にかけての鎌倉滞在と息子の病氣（長谷の病院に入院）について触れつつ、「久し振に海に入るのはい心持に候海を見た丈にても気分が晴々致候」などと記している。さらに、八月一二日付の松根東洋城宛の手紙では、「子供は鎌倉にある実には狭いきたない家だが山と松と見えるもしひまなら一所に行かう一晩位とまるのも一興に候」と同行を促している。結局この時は東洋城は同行せず、漱

石だけが一日に行き、翌日帰京したことがいくつかの書簡からわかる。このあと、漱石は、旧友の中村是公と共に塩原・日光・軽井沢・志賀高原への旅行に出ているから、結局この夏の田山別荘通いは、計三度ということになる。

7

『行人』中の描写と日記・書簡中に見られる描写とを突き合わせてみると、家・庭・畠などの具体物の様子はもちろん、そこで受けた印象や気分まで、ほぼ正確に作中に再現されていたことがわかる。特に重視したいのは、「庭に面して畠あり、畠の先に山あり大きな松を寝ながら見る。其所は甚だ可」（七月二一日の日記）という部分だ。この感想と「実に狭いきたない家だが山と松と見える」（八月一二日付の松根東洋城宛の手紙）とは地続きと受け取ってよいだろうから、漱石の受けた好印象は確かなものだったと言っている。そして、それが、「兄さんは物静かな座敷から、谷一つ隔て、向ふの崖の高い松を見上げた時、「好いな」と云つて其処へ腰を卸しました」（『塵勞』四七）というような、一郎が次第に救済されていく部分に生かされているのである。

ここから類推すれば、作中の、花や「蟹に見惚れて、自

分を忘れ」て〔「塵勞」四八〕、一郎が鬱屈した精神状態から解放されていくこの作品の核心部分にも、漱石の実体験や感慨が色濃く投影されていたと想像することも許されるのではないだろうか。また、だからこそ、あの「突然開いた天窓からさわやかな涼風が一気に吹き込んだかのような爽快感」は、一郎のみならず読む者をも強くとらえて離さないのだ。

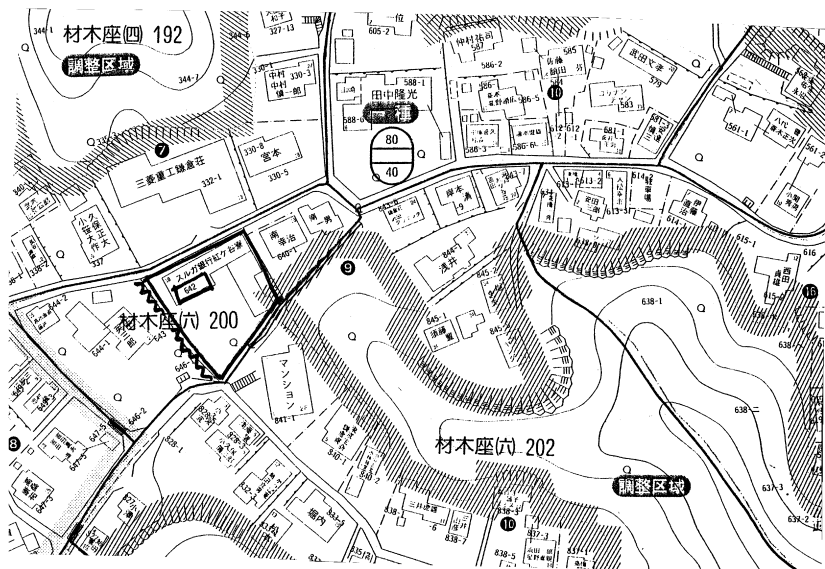
漱石の紅が谷体験は明治四五年の夏、それを取りこんだ『行人』『塵勞』の執筆は一年余りのちの大正二年秋だが、日記・書簡からではわからない紅が谷の詳細を小説は描いてくれている。すでに紹介したもの以外でも、「約三丁」ある海辺への散歩〔「塵勞」四九〕、避暑地の男女二人連、浜辺近くのあちこちに建つ「西洋人の別荘」やそこから洩れてくる灯火やピアノの音（これらのうちのいくつかについては、岩波書店版『漱石全集 第八卷』（一九九四・七）の『行人』の注解で言及した）、往来にある菓子屋と饅頭、など、精彩ある描写とともに紅が谷の日々は見事に再現されており、一郎の再生の舞台に花を添えている。

ところでボクは『漱石全集 第八卷』の注解や、本稿のもととなった小論「紅ヶ谷の青い空―『行人』から『心』へ―」（『湘南文学』六、一九九四・四）のなかで、田山別

荘のあった場所と現状についての考証をしているので、以下にそれを少し紹介しておきたい。

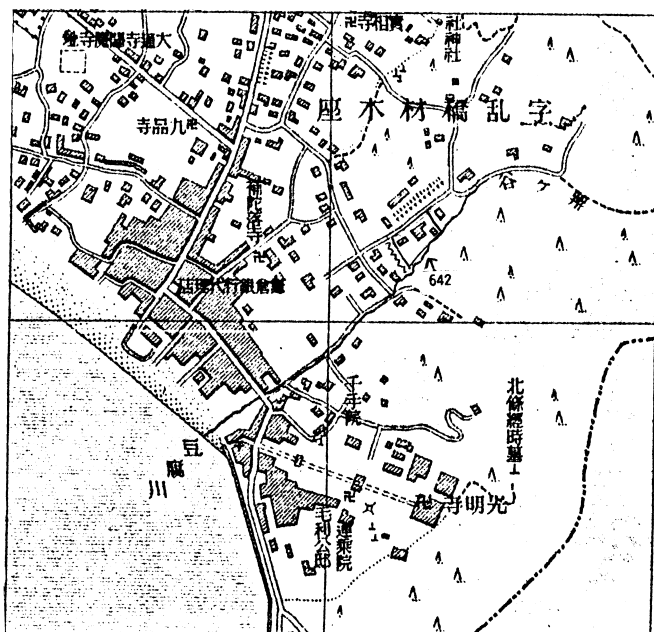
漱石関係の資料からは「材木座紅ヶ谷田山別荘」としか分らないが、前掲『現在の鎌倉』には「別荘一覽」なるリストが巻末についており、それを見ると、「田山」というのは、「材木座 六四二（別荘地） 東京、日本橋（住所）印刷業（身分職業） 田山宗堯（氏名）」のことであるとわかる。小論「紅ヶ谷の青い空」では、ここからの探索にベージを多く割いているが、ここでは結論のみを記すと、旧の六四二番地は一九九三年当時の材木座六丁目九番一八号であることが確かめられた。当時その場所はまるまる駿河銀行紅ヶ谷寮の敷地となっており、そのなかに寮のビルが建っていたが、四、五年前に解体・分割され、現在（二〇一一年夏）では何軒もの住宅にとつてかわられている。

駿河銀行紅ヶ谷寮時代の地図のほうが旧の六四二番地ときつちり対応するので、ここにはそれを掲げておくが（次頁の地図）、旧の六四二番地の範囲の確定をうけて、その場所を大正八年十一月刊の「鎌倉」（鎌倉市立図書館蔵）というタイトルの一枚図（次々頁の地図。なおここでは紅が谷は弁ヶ谷と記されている）で確かめてみると、旧の六四二番地（仮に四角で囲んでおいた）には建物が三つあつ



たことがわかる。すなわち溪流沿いの小さな建物、その上のカギ型の比較的大きな建物、そしてその左側の建物、の三棟である。『現在の鎌倉』の「別荘一覧」を見ても、六四二番地には田山宗堯の別荘のほか、「東京、小石川、水道」の三井三良助の別荘もあったことがわかるから、他の二つは三井家のものであったのだろう。

さて、そこで、三軒のうちのどれが田山別荘か、ということになるのだが、実際にその場所に行ってみると、その問題はいともたやすく解決した。というのも、駿河銀行紅ヶ谷寮の敷地と左隣の旧六四四、六四三、六四六の敷地との間には、現在でも相当な段差（左隣のほうが低地）が存在するからなのである（次頁の写真参照。なお現代と大正八年の地図にも段差部分に波線を書き加えておいた）。この段差は、『行人』では、「隣と我々の住居との仕切になつてゐる其処は、高さ一間位の土堤」「塵旁」四七」であると記され、しかも「我々の住居」のある方が高いことは、「其の垣根には珊瑚樹の実が一面に結つてゐて、葉越に隣の藁屋根が四半分ほど見えます」「塵旁」二九」、とあることからわかる。こちらよりは低地に建つ隣家の藁屋根が四分の一ほど見えた、というのである。ここから、六四二番地に建つ三軒のうちの左側の建物が田山別荘であつた



と推測できるのである。

実際にその場所に行ってみてもう一つわかったのは、材木座海岸にまで注いでいる小さな川がすぐ近くを流れていたということである（巻頭のグラビア写真参照）。地図には豆腐川と記されているが、この小川のことは、作品にも日記・書簡にも出てこないが、六四二番地から数メートルのところを流れるこの小川があったからこそ、一郎が「見惚れて、自分を忘れ」た蟹も、隣家との境をチョロチョロすることができたわけである。「薄の根には蟹が這つてゐました。小さな蟹でした。親指の爪位な大きさしかありません。それが一匹ではないのです。しばらく見てゐるうちに、一匹が二匹になり、二匹が三匹になるのです。仕舞には彼処にも此処にも蒼蠅い程眼に着き出します」（『塵勞』四七）。

こうなると、もう一つ確かめたいのは、日記に「光明寺の裏の松山の松が軒を圧して見える」、「庭に面して畠あり、畠の先に山あり大きな松を寝ながら見る。其所は甚だ可」と記され、松根東洋城宛の手紙でも「実に狭いきたない家だが山と松と見える」と記された、山と松と、さらにその向こうに広がっていたであろう抜けるような青い空、の光景だ。何しろそれは、「高い松が空を突くやうに聳えてゐる

るのを日さんと一郎が「高尚な課業のやうに心得て」（『塵勞』二九）朝夕見上げていたものであり、心を病んだ一郎が「物静かな座敷から、谷一つ隔て、向ふの崖の高い松を見上げた時」、「好きな」（『塵勞』四七）と思わず咳かずにはいられないほどのものだったのだから。

結論を先に言ってしまうと、その光景はほぼ百年後の今日でも、おそらくほとんどそのままのかたちで目にすることが出来る。巻頭のグラビア写真がそれだが、「此山全体がある伯爵の別荘地で」（『塵勞』二九）とある伯爵とは、漱石の妻鏡子夫人の実家中根家の縁続きの大本伯爵のことで、『現在の鎌倉』の「別荘一覽」にも、八二八番地の大本遠吉（伯爵）として出ている。そして現在でも、山も広い敷地も重厚な門構えもおそらくは往時の雰囲気そのまま残しており、したがってわれわれは一郎や漱石が見た光景をほとんどそのまま追体験することも可能なのである。

8

ここまで見てくれば、『心』になぜ「鎌倉」としか記されず、逆に『行人』には「紅が谷」とのみ記され、「鎌倉」とは記されなかったかは、明白だろう。一郎にとって、そして『行人』という作品にとって、「紅が谷」という場所

は格別な場所であり、だとしたらそこに「鎌倉」などという（俗悪な）具体名をあてることなどとうていできることではなかったのだ。そればかりでなく、『行人』においては「材木座」という地名すら忌避されている。容易に「鎌倉」と結びつけられてしまう地名だからだ。

この逆が、『心』の場合だ。小論「紅ヶ谷の青い空」では『心』における「鎌倉」の意味を取り違えていたが、先生にとって、鎌倉の海は一郎にとっての「紅ヶ谷」のようなものではなかった。癒される場所でも、再生のキッカケを与えてくれる場所でもなく、単に、自死に向けてのモラトリウム状態にあった先生がひと夏を過ごした場所に過ぎなかったのである。だとしたら、そこに、格別な場所であることを意味する「紅ヶ谷」などという具体名をあてることなどありえなかった。『材木座』にしても同様である。『材木座』は基本的には「紅ヶ谷」に準じる肯定的な地名であり、『行人』で忌避されていたのは、忌避すべき否定的な地名であったからではなく、容易に「鎌倉」と結びつけられてしまう、という間接的な理由からであった。その意味で、単なる海岸に過ぎない『心』の海水浴場にふさわしいのは、肯定的、別格的な意味を持った「材木座」や「紅ヶ谷」ではなく、「鎌倉」という（俗悪な）地名だった

のである。

実は『心』に登場するエピソードのなかで、漱石の紅が谷体験に基づくものであることがハッキリしているものが一つある。新書版の漱石全集の注解でも指摘されていることだが、三度あった漱石の田山別荘通いのうちの一度目の二日目、すなわち七月二二日の日記に記されている「浜へ出て見ると、海浜院に逗留の唐人海につかつてゐる。女は赤や水色の手拭様のものを頭へ巻きつける。着物も膝迄のを着る」が、『心』の「私」が「其二日前に由井が浜迄行つて、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた」（上二）という部分に生かされていたのである。

にもかかわらず、前述の理由から、『心』では「紅ヶ谷」という崇高な地名はもちろんのこと、「材木座」という地名すら作中に記されることはなかった。考えようによっては、そのおかげで『行人』の「紅ヶ谷」は、「鎌倉」と結びつけられることを免れ、その、この上もない聖地性を保証されることになったとも言えるかもしれない。

（立教大学）